

『シイタケ栽培同好会』—後記—

空 気 と 時 間

このイベントをもって、28年度のながさき県民の森の主催イベントは、無事すべて終了となり、4月からまた、新たな年度のイベントで、皆様とお会いすることになります。

このイベントと、2月の炭焼き体験・見学会は、10年20年続いているほかのイベントと違い、ここ2、3年ほどの短い歴史しかありません。そして県民の森イベントのウリであるお持ち帰りの手土産もない、そればかりか、結構な重労働をお客様に体験してもらうという企画です。だからかどうかわからないけれど、始めた当初は、ほんの4、5人しか参加者のいない、細々としたスタートでした。それで も企画した
私は、小さな赤ん坊が、自ら育つ力をもって生まれてくるように、この企画もいずれ育ってくれると思って続けてまいりました。今年、どちらも数十名の方々に、ご参加いただくことができ、わが子が育つを見るような幸福を味わわせていただきました。形ある手土産はないけれど、それでも形のない手土産は、ちゃんと用意したつもりでありましたから、それを喜んでお受けいただいたようで、とてもうれしく思います。



高度成長や、バブルを経験したのち、多くの生活者が、我に返ったように、その間に自分たちが選択してきたものを見つめなおすような気持ちになりました。選択したものを見つめなおすというのは、同時に捨て去ったものに思いをはせるということでもあります。そうして、山間地や、景勝地に立地している私どものような公共施設に向けて、「箱モノのハードがあるばかりで、中身のソフトがない。」などという声が、しばしば聞かれるようになりました。実に30年余りも前の論議です。以来多くの人々が、その宿題に様々な立場で取り組んでいます。私どものような公共施設の運営に携わる人間ばかりでなく、全くハードを持たない人々の間でも、自前のソフトサービスだけをもって世に問おうと、自然学校や、体験塾を立ち上げる動きが生まれました。実は、私もかつてその一人でしたが、そのような人々にとっての最初のテーマは、どこも共通して、「どうやって地域の方々と連携してゆくか」ということでした。地域に根付き、しかし失われつつある生活技術の中に、現代と、将来の人々にとってのそして、社会全体にとってのニーズがあると、だれもが感じ取っていたのです。



そのような経験をしてきた企画者である私にとって、ながさき県民の森は大変に恵まれた環境でした。なぜなら、この地域に生まれ、その空気を吸って育ち、地域の生活技術を日常のものとして身に帯びている人たちが、連携する相手としてではなく、同じ釜の飯を食う仲間として最初からいたわけですから。私は、人々に向けて、「ここにはこんな人たちがいて、一緒にこんなことができるよ」といったことを、できるだけ多くの人に届くように声をかけるだけでよかったのです。

人々は、豊かであろうとして、世の中をどんどんと変化させてゆくわけですが、その中で捨て去って来たものの中にも、私たちが豊かにしてくれるものが沢山あることを、イベントに来てくれた方々に、一緒に過ごす時間を通じてお伝えできればと思っております。その時間と空気こそが、ながさき県民の森のイベントの本当の手土産です。「空気と時間」、まさに、手で触れることのできないソフトサービスです。少し逆説的な言い方となりますが、それにしっかりと手ごたえを与えてくれるのは、この地域で生まれ育ち、多くの時間、その空気を呼吸して暮らしてきた、地元のスタッフたちです。短期

間で、よそから仕入れてきた知識や技術では生み出せない、「空気と時間」はその人たちによって醸されています。

世の中の変化を押しとどめることは、誰にもできないのですが、それを、制御できないほどのスピードに加速させることなく、生き物である私たちの心と体が、きちんと対応できる速度に保つ役割は、社会の中で誰かが果たさなければならないように思います。そしてそれは、少なからぬ公費を費やして運営されている私どものような施設に託されている役割ではないかとも思います。

単に余暇を過ごす行楽施設のイベントに、やけに大風呂敷を広げたものですが、わずかでもそんな役割を果たしているのではないかと、私たちが自負してこられたのは、地元スタッフの存在があってこそそのものです。

私どもは、30年前の宿題にきちんと取り組んでいるか、これからも自問を続けながら歩んでまいりたいと思います。29年度もながさき県民の森のイベントをよろしくお願いいたします。

[ダイジェストムービー](#)

[写真アルバムはこちら](#)